春陽会ニュース

今年も終る

木村荘八

今年も終ろうとするが、来年は中川・僕の如き数え年五十八歳となり、小杉さんは七十歳となる。会のもの、中堅年齢をとって見ると、最長の七十、最少の四十一(四捨)を均らして、ずっと四十六歳くらいは、新しい春陽会をもの成育することにもなるだろう。会はまだまだ若く才ロこそ回復を迎える。

山本さんに続いて今年は小林徳三郎を失ったが、一方新会員新会友を獲て、里用金のようにも力も入れ甲斐は有ること思うし、春陽会関係のものは、絵以外のことは何も心配する必要はない。

会場でいろいろ聞りなくて多少要は少しも無い。入場者が一人も来なくても同僚会来ったとまえであるのに入場者ほどの来るだけは来るのである。此の上は「会」そのものがカッチリとしていればいいので、政治も経済も何も要らぬ。

絵は無ければまあぬ。絵は断じて無ければならないが、他のものは何も要らないのであるから、互いに一意専心、絵をかこうではないか。これは互いに絵かきが絵をかこうというのであるから、即座に皆OKだと思う。絵をかこうと春陽会人は、一切利益がうるのに、という意味一同りを踊らぬ非俗のように、つとらはだけだろう。

僕は実は今年の秋強るして春の展覧会も秋の展覧会も上野の文部展を給人と見逃したので、今年の展覧の動向というについては、口ざ申けをいうが、只一つ二つ見たものは、つまらないと思いたに違ないが、秋にもってから、毎日美術展というもので妖武の作品が授賞されたのは、ずいぶんと思うこの作品は、ずいぶんと純粋に陽ちんとする妙味を、あの前衛に会い正めた功績は、賞賛されて良いものである。—それから、極楽寺叶長、松園展、大観展、正倉院展……と見た。

正倉院のもの、陳列は、百合の用思く、絵巻の島毛立女屏風の如き、ギリシヤ初期の芸術品の如く、天衣無縫の優雅さもの、と思い、彼等国の彫りもの堂々たるは、世界でこれに比敵するものはエジプト古王朝のものだろうと思う。

ここ上一寸思い付くのは、アメリカのブルッセという人が来て、日本へ来て見てはじめて指輪の美意を知った、とえらいは、面白いことだなと思う。正にそうあろう。指輪は第一に装飾品の、最も美しい宝石の一つで、日本の装飾である。

松園・大観・松園・大観紀念展はそれぞれ、感銘深きものがあった。(「世界美術」)これはついでそう都度、故郷の絵巻を延べ、つ二つ見たものは、つまらないと思いたので、平凡は略し、三観の一場合けを簡単ならうれば、松園、女子四人については、その初期の学生時代の仕事を資料紀くさきうの思ったっ。あれかけ、美術、高等に、外国を学んだ作家は、近、秋山さん、遠く高橋由一の他には、日本に無かっただろう。

大観さんについては、可惜この方も前者の「長見会の壁」の島は美術より以上に美平されたとを思い、松園さんは女性だけにその美が素直であるから「説し」かったろうと思った。

ここに「説し」と云ったは、皆人云う、これは孔子の言葉の「学而時習之亦不説乎」から引くものであるが、昨年僕は(教場でも)同じく孔子の「事を先にし得を後にする」と云うこと、人生はいつもこの心がけが良いと訓えた言葉を引いたことがあった。今「学を先に」をれば「説」さしかと思う。

上野とよく話すことであるが、上野は前に呉成恭を始めたまべあった。それでたんまりと儲けてから、栄ヒあと絵をかこうというと決ってあった。僕はその相談を受けた時に、さうどうかナと思った。結果はその時、上野は相当儲けらしいが、同時にそれかけ力カリがかかって、その期間絵がかけなかっただけが厳然たるマイナスとまう決算だった。イノチがけの損をしたのである。上野はこれに懲りて、決して